

日本庭園は空間としてイメージされてきた。例えば、庭園には散歩する回遊式庭園もあれば、その外に座ってじっとして楽しむ観賞式庭園もある。波を連想させる砂利の掃き目の枯山水、或は親密な空間としての露地を思い浮かべる人もいるに違いない。どちらにしても、庭園のことになると、時間より空間として認識される傾向にある。そこで、私は時間を導入して考察したい。

日本文化において、昔から時間と空間が一緒に体感されていると思われた。この現象が間（ま）という概念と結びれて20世紀の後半から、剣持武彦、飯村隆彦、松岡正剛らの日本の研究者、また、Richard Pilgrim、James W. Boydらの海外の研究者の注目を浴びてきた。このような間（ま）の先行研究では、時空間の同時の流れが、日本の独特な見方として見做されて、様々な分野で研究されている。例えば、1978年にパリで行われた〔「間」―日本の時空間〕展において、歌舞伎の空間が時間の流れと見做されている（"space is considered as a time flow"）と指摘されている。または、清家清が『「ま」と日本人』のゼミナール（1981）の発表で、住まいの間（ま）としての日本の伝統的な住宅の部屋について「時間の流れに伴いながら成立する空間である」と述べる。

上記のような先行研究においては、庭園における時空間に触れる研究者も現れた。Günter Nitschke は、『From Shinto to Ando』（1993）で石川丈山の詩仙堂を分析するところで、茶室に入る前の通路という空間が歩く人の時間の感覚に与える影響を示唆した。そして、庭園における時間性となると、『紫明』の特集「間（ま）」、第三十四号（2014年3月）で小野健吉が述べるように、庭園の空間で季節の移ろいという時間性を感じさせることも想起される。これらの研究が、日本庭園における時間と空間の関係性に言及した点で先見的であるが、両者の関係性について簡潔にしか触れていないため、庭園における時間についての検討が不十分である。そこで、本発表は、時間と空間も結びついている間（ま）の先行研究の流れを受けて、空間の面が強調される傾向の強い日本庭園には、時間の面が表れていることを明らかにすることを目的とする。そのために、庭園における、鑑賞する人に時間の認識を与える要素に着目する。発表者はこの要素を、視覚的、運動的、聴覚的な要素の三つのタイプに分類できると考える。より具体的に言うと、視覚的な範囲に入るものとしてまず浮かぶのは、季節の移ろいを表す植物などだ。それに、非対称的な景色や、Günter Nitschke が挙げた視覚を制限する通路が加わる。運動的な要素は、動いている体を個人に認識させる飛び石、中門などが考えられる。聴覚的な要素としては、ししおどし、滝、水琴窟などがある。

更に、日本庭園の研究は主に歴史的な面と技術的な面が進んでいるが、鑑賞における研究は未だ十分ではない。本発表は、日本庭園における時間性を明らかにすることで、庭園鑑賞の研究の一助となるのである。